令和５年度　第75回全日制卒業証書授与式式辞

令和６年３月１日（金）

厳しかった冬の寒さも日ごと和らぎ、校内の木々も新たに巡り来る春を迎えるかのように枝を広げ、木の芽を膨らませた今日の佳き日、ＰＴＡ会長　川﨑奈見様、同窓会長　毛利泰治郎様、愛媛県議会議員　石川剛様をはじめ、御来賓並びに保護者の御臨席を賜り、令和五年度愛媛県立川之江高等学校全日制課程第七十五回卒業証書授与式が挙行できますことは、卒業生をはじめ在校生並びに教職員一同の大きな喜びであり、厚く御礼申し上げます。

ただ今、めでたく卒業証書を授与された一六八名の皆さん、御卒業おめでとうございます。本校における三年間の修学に対して重ねてきた皆さんの努力に敬意を表するところであります。また、この日を待ち望んでこられました保護者の皆様に対しまして、心よりお喜びを申し上げます。

振り返りますと、皆さんが中学生だった四年前の春以降、日本はもとより、全世界にとって新型コロナウイルスのまん延が脅威となり、学校現場にも大きな影響を及ぼしました。集団感染を恐れる緊張感のなか、皆さんが楽しみにしていた学校行事の中止や縮小、さらに部活動においても活動の制限や各種大会の中止など、やりきれなさや喪失感を埋めるのは簡単ではなかったと思います。悔しさを胸の内にしまい、前を向くという強さを発揮するとともに、当たり前が当たり前ではなく、ありがたいことだったということに気付き、感謝することの大切さを学んだことと思います。また、そのような状況の中、皆さんと我々教職員が手を携えて、充実した学校生活を模索したことは、皆さんにとっても、我々教職員にとっても大きなプラスになったに違いありません。お互いを気遣い、思いやることの大切さについても学ぶことができたのではないでしょうか。ようやく昨年五月には、感染症法上の位置付けが緩和されたことで、いわゆる日常の学校生活が戻りつつあり、皆さんがかけがえのない思い出を心に刻む機会が増えたことを私自身、うれしく思いながら過ごしてきたところです。

さて、私が一昨年の四月に川之江高校に赴任して以来、皆さんに一貫してお話ししてきたことがあります。自分なりに「希望（ゆめ）や好奇心を持って何かにチャレンジしてほしい」ということです。失敗してもいい、「なぜ？どうして？」という思い、すなわち「好奇心」を持って知ろうとする気持ちやチャレンジする気持ちが皆さんを成長させる原動力になるということを、彫刻家の平櫛田中や中国から日本にやってきた鑑真の心の持ちようを通してお話ししてきました。

日本初の南極観測隊の越冬隊長を務めた京都大学教授の西堀栄三郎さんは、『石橋を

叩けば渡れない』という著書のなかで、何か新しいことをするときの心構えについて次のように記しています。「何か新しいことを始めるには、リスク（危険）が伴います。大きな失敗をするというリスクもあれば、現状より状況が悪くなってしまうリスクもあります。だから、やるかやらないかを決める前に十分調査・検討すべきだという考え方もあります。しかし、そんな考え方ではとうてい新しいことはできません。やるかやらないかを決心する前に、こまごまと調査・検討すればするほど、やめておいた方がいいんじゃないかということになります。石橋を叩いて渡るとか、渡らないとかいうけれども石橋を完全に叩いてから、渡るか渡らないか決心しようなんて思っていたら、おそらく永久に石橋は渡らないことになるだろうと思います。」

繰り返しますが、「希望（ゆめ）や好奇心」を持って新しいことにチャレンジした結果、失敗に至るかもしれません。そうなったとしても、そのチャレンジの過程には大きな意味があると考えます。そこからは、同じ失敗を繰り返さないという強い決意、成功に導くための思考力や工夫、臨機応変の対応力、実践力が生まれてくるからです。チャレンジしようという意志、挑戦しようとする勇気が未来を拓くはずです。リスクを恐れて石橋を叩いているだけでは、永久に橋を渡ることはできません。一人一人が、「為せば成る」の心構えをもって前に一歩進んでみる、そこからこそ、新しい道は切り拓かれていくと私は考えています。西堀先生の言葉を借りて表現するならば、「とにかく、やってみなはれ」ということです。

次に、江戸時代の末期にアメリカ留学を経験し、のちに第二十代内閣総理大臣に就任した高橋是清が口にしていた言葉を紹介します。「逆境も心の持ちよう一つで、これを転じて順境たらしめることもできる。」この言葉の意味は、例え自分にとって、逆境（困難・苦難）が訪れたとしても、自身の気持ち次第で順境へと変えることができる、すなわち気持ちの持ちようで苦難を乗り越えることができるということです。つまり、「だめだ、自分にはできない」とネガティブに考え、嘆いているばかりだと不可能を可能に変えるのは難しい、しかし、ポジティブな気持ちで、「自分ならできる、新たな方法を試してみよう、チャレンジしてみよう」と思うことで、少しずつ状況が変化することもあるということです。高橋是清は、最終的には、日本銀行総裁や大蔵大臣、そして内閣総理大臣を務めていますが、その人生は苦難の連続でした。十歳代前半のアメリカ留学ではいわゆる奴隷として強制労働を強いられたり、南米のペルーや日本での詐欺被害、事業破綻を経験するなど、信じがたいほどの波乱万丈、七転び八起きの人生を送ったことから、転んでも、転んでも起き上がる「ダルマさん」の愛称で国民に親しまれていました。類いまれな人生体験をもつ高橋是清は、「強い精神力、大胆な行動力に加え、大きな包容力

そしてポジティブ思考」の持ち主だったと言われています。苦難の連続のなか、「強い精神力や大胆な行動力、大きな包容力」により、関係する多くの人たちが彼を支え、援助し、そのおかげで危機から脱出、次のステップに邁進したと言われています。もしかしたら、彼の人間性がツキをよんだのかもしれません。

私は、南極観測隊の越冬隊長を務めた西堀栄三郎と内閣総理大臣として日本をリードした高橋是清には共通点があるように思います。すなわち、「やると決めて、どうしたらできるか考えてみる」、ポジティブな気持ちで、「自分ならできる、チャレンジしてみよう」と行動してみる、このことに尽きるのではないでしょうか。このような気持ちを持つことが、自分自身を大きく成長させ、豊かな人生につながると私は信じています。そのことが今まで皆さんの成長を支えていただいた保護者の皆様にとっても、皆さんと関わってきた我々教職員、そして、皆さんの力を待ち望んでいる地域社会にとっても、この上のない喜びとなるはずです。

ここにいる卒業生の皆さんにとって、この川之江高校は「母校」であり、心の拠り所としての「ふるさと」であります。皆さんの成長に大きく係わった「母校」を、「ふるさと」を大切に思うとともに自分自身の人生をしっかり見つめて前向きな気持ちで歩みを進めてほしいと思っています。現代社会は予測困難な時代の途にあり、皆さんが歩むこれからの道は決して平坦なものばかりではありません。時に閉塞感にさいなまれることもあるかもしれません。しかし、「希望（ゆめ）や好奇心、チャレンジする気持ち」を持ってたくましく、前向きに歩むことで、それらの壁を乗り越えることができるでしょう。皆さんが在学中に支えてもらったように、今後は本校同窓会の一員として、後輩たちを応援してくれることをお願いします。

結びになりますが、保護者の皆様、お子様が心身ともにたくましく成長し、本校を卒業していく姿を目の当たりにして、様々な思い出に万感胸に迫るものがあることと存じます。お子様たちは、一人一人がこの三年間で大きく成長してくれました。これからも皆様の御期待に応えてくれるものと確信しております。

卒業生の皆さん、いよいよ旅立ちの時がやって来ました。これからは、皆さん自身が、今まで支え、育ててもらったふるさと・地域社会の一員となり、後進を支えていく側に立ちます。本校で培った自主・自律の精神で、よりよい地域づくりに貢献しつつ、力強く、そしてたくましく人生を生き抜いてください。名残は尽きませんが、巣立ちゆく皆さんの御健勝、御多幸と一層の御活躍を心から祈念し、式辞といたします。

令和六年三月一日

愛媛県立川之江高等学校長　松木　義明